

第一三三話

頼光朝臣上洛勅賞事

『前太平記』上 卷第十八 三七三頁から三七七頁より

やがて頼光親子は、保昌・四天王を連れて、千丈が嶽・大江山の賊徒を全て退治

千丈・大江の逆賊悉く退治あり、

して、酒顛の首を取って、都にご開陣になると噂されたことで、見物人の貴人も賤民も、都は申し上げるに及ばず、近国遠国山々寺々の童や法師、老若男女問わず、我も我もと集まり来て、東寺や四塚、朱雀大宮、六条(老)の辻々に、人は肩をそろ

人は肩を峙て、

え、左右を振り返って見ることも出来ず、車は轍に擦れ合うようになり、前後に動

左右を顧みる事を得ず、

車は轍を輾り、

前後に

かすことも出来ず、「今日鬼の首と言うものが都に来るようだ」と言って、響き

廻らすに及ばず、

「今日こそ鬼の首と云ふ物の上るなれ」とて、

渡って居座って待っていた。なにはともあれ一番に、小具足を付けている足軽二百

轟き渡りて待ち居たり。

人、二列に並ぶ。次に思い思いに鎧を着ている武士百騎が、バラバラに入り混じる。その後に酒顛の首を矛に突き通し、間に六人で上に高く上げている。見物人の男女は、朝から先を争い首を長くして、今か今かと待っているのに引き替えて、二

今朝より膝を争ひ首を伸べて、 今や今やと待ち設けたるに引き替へて、

目と見ることも出来ないで、俯きになって座っている者の、その数も多かった。引

二目とも見得ずして 俯しに成りて居たる者、 其数も多かりき。

き続いて騎馬の武士二百騎余りが、首を守って馬を進めた。それから一町ほど下がって最初に旗差、その次にどこまでもがっしりとした乗り換えの馬三匹、馬は具足に金銀を装飾し、皆さんの馬引き六人でこれを引く。大將軍（頼光）の装いには、紺の布地の錦の鎧の直垂に、紫下濃^(貳)の大鎧、鬼丸の靈劍には虎の皮の尻鞆^(参)をかけ、鷹と鵠の羽とを交ぜて作った矢、矢筈が高く見えるように背負い、塗篋藤の弓^(肆)の真ん中を握り、宿月毛^(伍)の馬が太くがっしりしているのに、金覆輪の鞍を置き、厚総の鞆^(陸)をかけてお乗りになった。馬の周りには同じ具足をしている徒歩の兵、百人余りが静かに囲む。嫡子の下野判官頼国は、赤の布地の錦の鎧の直垂に、緋緘の鎧と同じ毛色の五枚兜、太刀、打刀に金銀をちりばめ、黒栗毛の騎馬に、鞍、鎧、尻繫まで色々な用意をし、一段と優れて装って、馬上で安らかに馬を進められる。その次に渡部、酒田、碓井、卜部は思い思いに装い、皆さん一途に連

各混物具したる

いてくる歩兵を馬の前後に立てさせて、それぞれ一斉に馬を進めた。後軍はずっと

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

歩卒馬の前後に立てさせて、

一勢一勢打たせたり。

下がって、権大夫藤原保昌は千騎余りで進めた。大將軍（頼光）からはじめ、皆さん才能・力量・体つきは優劣があるとも思えず、近頃鬼神のようだと噂にだけ聞い

各器量骨柄何れ優劣ありとも見へず、

日来鬼神の如く音にのみ聞きし

た遠国の者たちも、「今回の行いは普通の人働きでない。このような世にも稀な

遠国の者共も、

「今度の挙動、凡人の所為に非ず。

斯かる希代の

勇猛な將軍・勇士が、同じ時代に生まれ、主人となり家臣となり、神仏がその徳を

猛将勇士、

同じ代に生まれ合ひ、

君となり臣となり、

上其徳を施せば、

与えるので、臣下（となる彼ら）がその力を振るったのだ」と心に感じ思わない者

下其威を振るひし」

と感思せぬは無かりけり。

はいなかった。

こうして酒顛の首は六条油小路(漆)から真っ直ぐに東へ通って河原に出て、檢非違使の手に渡す。すぐに鉄の串に突き通して人目に触れるようにした。そして皆さんは油小路(捌)を北に向かい、真っ直ぐに内裏にご参上された。殿下をはじめ、三公九卿_(政)は、その武徳を感じ、皆さんが無事なのをお祝いになった。すぐに叙位除目(拾)の儀式があり、左馬頭源頼光朝臣は肥前国守に兼任される。権大夫保昌は丹後国守に任命され、四天王の仲間も皆さんも大きな荘園を二、三ずつ割り当てられ、とても御感をいただいた。

こうした形で、縁起のよい日を選び出発し、頼光朝臣は九州にご下向になり、保昌は丹後に向かい、皆さんは御着任になった。

注釈

※壺・東寺や四塚、朱雀大宮、六条……地図一を参照。

※式・紫下濃……「紫裾濃」のこと。上は薄い紫色に染められ、裾の方は濃い紫色で染められたもの。

※参・尻鞆……鞆に被せる毛皮の袋。

※肆・塗籠藤の弓……幹を籐ですきまなく巻き、漆で塗り固めた弓。

※伍・宿月毛……馬の毛色の名称。赤茶色を帯びた白い毛色の馬。

※陸・厚総の鞆……鞆は馬にかける緒の総称。厚総は馬具に厚く垂らしたふさ。

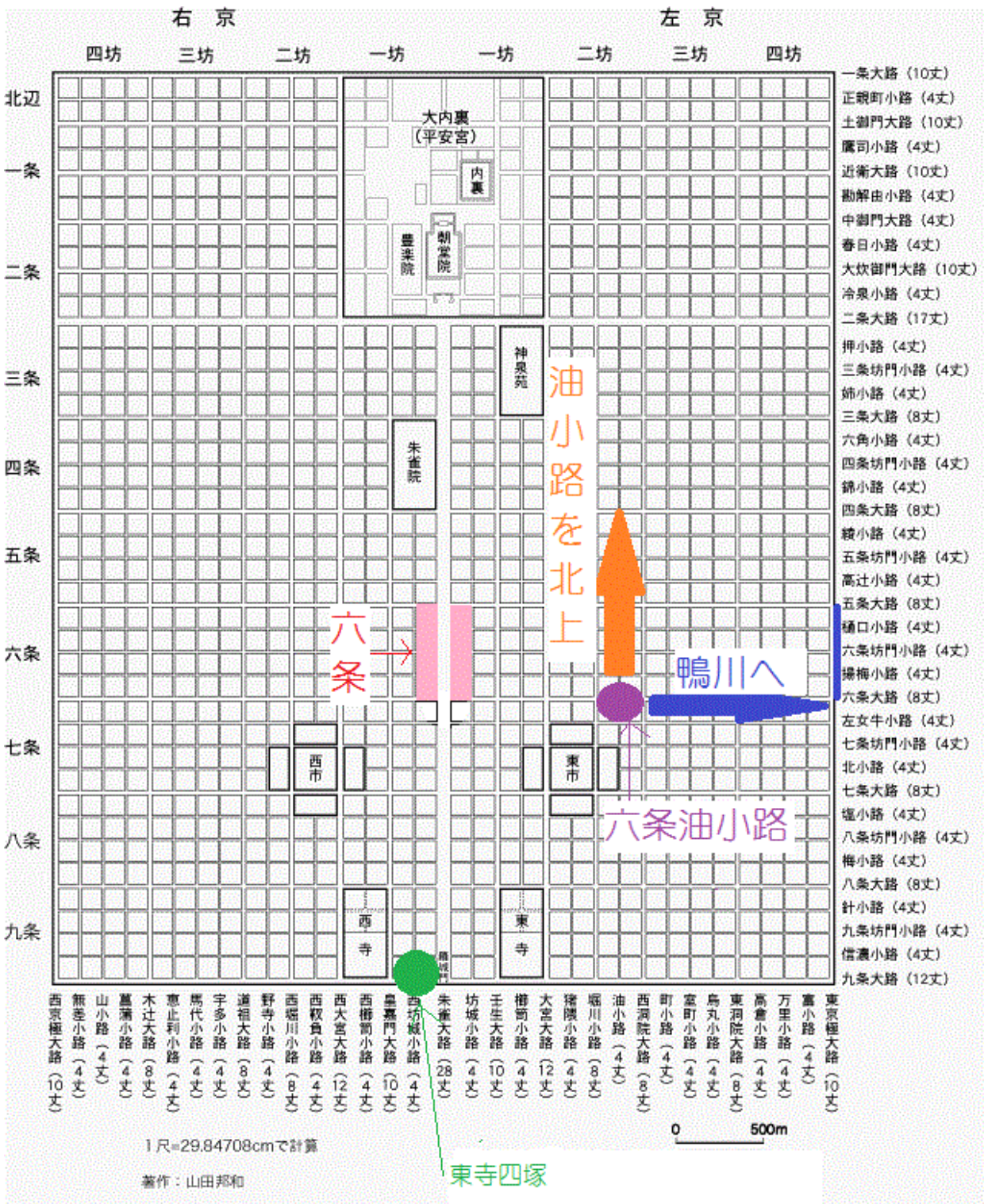
※漆・六条油小路……地図一を参照。

※捌・油小路……地図一を参照。

※玖・三公九卿……三公は大臣・左大臣・右大臣、のちに左大臣・右大臣・内大臣の総称。九卿は公卿のこと。

※拾・叙位除目……「叙位」は位を授けること。「除目」は大臣以外の官職を任命する行事。

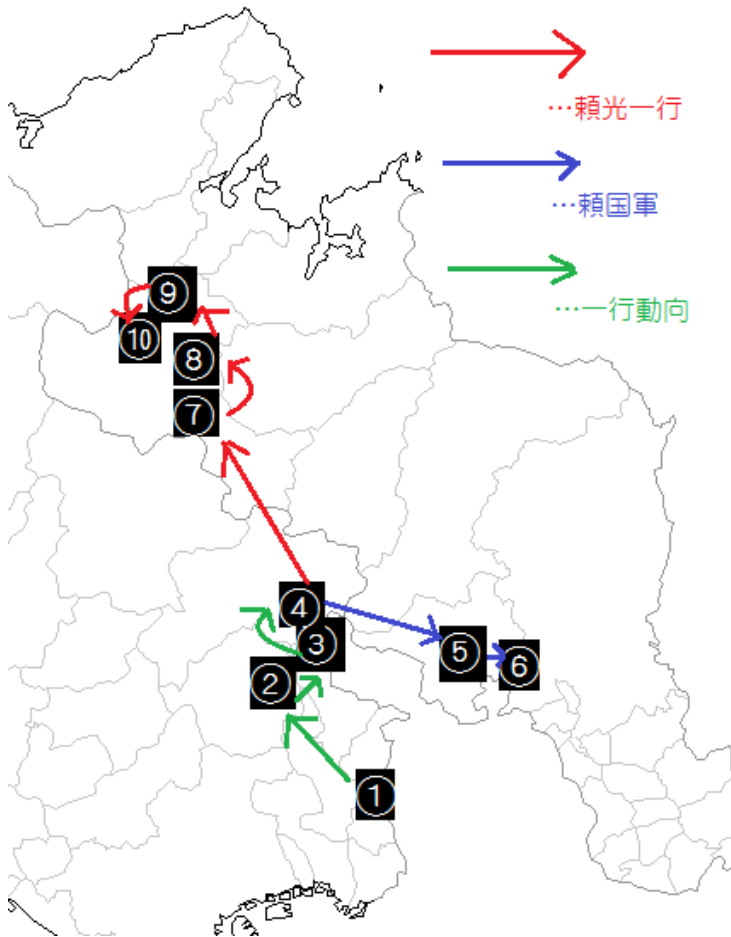
<地図一>



※こちらの図は「平安京探偵団 (<http://homepage-nifty.com/heiankyo/>)」様より拝借し、加工いたしました。

<地図二 『前太平記』 中で頼光・頼国一行が訪れた地名一覧><地図二>

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※



① 多田	兵庫県川西市多田。
② 大井の光明寺	兵庫県三田市の光明山観福寺か？満仲の伝承地。 現在調査中
③ 杓子峠	現兵庫県篠山市と猪名川町を結ぶ旧道。多田満仲が 摂津丹波の境を定めた地。現在調査中
④ 無根坂	篠山市後川。現在調査中
⑤ 丹波国府	京都府亀岡市。
⑥ 大江山	京都府亀岡市・京都市。
⑦ 福智	京都府福知山市福知山城下？ 現在調査中
⑧ 住吉の祠	京都府福知山市大江町元伊勢外宮か？ 現在調査中
⑨ 千丈が嶽	大江町大江山連峰千丈が嶽
⑩ 天田郡	大江町を除く福知山大部分。天座地区か？

長らくお付き合いいただきました、『前太平記』における「酒呑童子退治」、これにて完結いたしました。訳は終わっていたのに更新に一年もかかってしまった…。

ですが一年をかけて作中に登場する地名の数々の調査は進みました！特に兵庫三市にわたる地名については、実在するとは思いませんでしたし、ちゃんとした道ができることに感動しました。これだけの地名が実在し、現代誰も知らないことが描かれる『前太平記』は江戸時代初期の伝承を知ることのできる貴重な資料であると思うのです。

それで、語りたいことはたくさんありますが、多くありすぎるので、おそらく今回で登場が最後となるであろう保昌についてあえて語らせてください。

この酒呑童子退治の一連の中で、保昌は頼光公とほぼ同格、もしくは保昌が少し下なくらい存在であることがよくわかります。ほんの少しだけ。

本文中、作者藤元は保昌に敬語を使っていないのがあまりにも露骨です。作中、この物語では保昌は頼光より年上です。官位もほぼ同格。なぜ藤元は保昌に敬語を使わないのか。

今ここで史実伝承踏まえて保昌を分析したい。彼の弟保輔・甥斎明は作中でも語られる通り強盗の犯罪者。父致忠は鬼退治の10年後に流刑となり、祖父元方は政敵を恨み怨霊へと身を落とす。そして、その後結ばれる和泉式部は主君である藤原道長に「浮かれ女」と嘲笑されている。

まるで不幸のオンパレード。これらの要素が、藤元が保昌を露骨に差別する理由になりえないでしょうか。

おそらく、保昌は都の中では肩身の狭かったことでしょう、神童というべきか神にもお上にも愛された頼光公と、比較されるべき存在だったのか。

保昌が藤元に嫌われていたとは言いません。むしろ、保昌と保輔の邂逅は、藤元の彼への愛情を感じました。

しかし、それらの背景は保昌を頼光公と同格へはあげてくれなかったのではないのでしょうか。

…保昌に漂う哀愁ははかなく薄暗く美しいものですね。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(__)m

公開：2018/3/31

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

改訂：2021/3
海熊童子